

# 日本語における事態の捉え方・描き方の「型」の解明とその習得に関する研究 ——英語・インドネシア語・ベトナム語・タイ語との比較——

関西国際大学 基盤教育機構 伊藤 創

## 研究成果要約

### 1. 研究活動の概要

各言語には事態の描き方に関して好まれる「型」があることは古くから指摘されているが、本研究では、特に〈一方の参与者から他方の参与者へと何らかの働きかけがなされる事態〉を取り上げ、こうした事態を日本語母語話者と英語母語話者および東南アジアの諸言語（インドネシア語・ベトナム語・タイ語）の母語話者が、それぞれどのように描く傾向があるのか（どのような「描き方の型」を持つのか）、またその描き方の背後には、その描き方から推測されるような認識の違い（「捉え方の型」の違い）があるのか、さらには言語学習によって事態の描き方の型の習得が進むのか、などを様々な画像に対する描写の比較、注意probe testなどによって検証した。

### 2. 研究成果の概要

本研究では、一方から他方への働きかけがなされる多様な事態の多くについて、日本語母語話者は、調査対象であった各言語母語話者よりも動作や力の〈受け手〉（= Patient）に焦点をあてて描く傾向が強いことが明らかにされ、またその傾向は、東南アジアの諸言語の母語話者、英語母語話者の順で弱まっていくことも確かめられた。逆に言えば、英語母語話者が最も動作や力の〈働きかけ手〉（= Agent）に焦点をあてた描き方をする傾向が強く、東南アジアの諸言語の母語話者、日本語母語話者という順でその傾向が弱まる傾向があるということである。

また本研究では、これらの画像に描かれた事態の「次」の事態を想像し、描写する調査によって、日英語母語話者がこれらの事態を異なった焦点のあて方で「捉えている」可能性が示された。すなわち、英語母語話者はAgentに焦点をあてて事態を「描く」だけでなく、認識のレベルでもそのように事態を「捉える」傾向があるということであり、日本語母語話者についても、その「描き方」と「捉え方」の両方で、Patientに焦点をあてる傾向が英語母語話者より強いと考えられるのである（東南アジアの諸言語の母語話者と日本語母語話者の間には今回の調査では統計的に有意な程の傾向の違いは見出だせなかった）。このように事態の「描き方」だけでなく「捉え方」の型についてもその違いが示唆された日英語母語話者については、発話を前提としない状態でもその「捉え方」に違いが見られるのかを明らかにするため、注意probe testも行ったが、ここには有意な違いは見られなかった。この結果から、本研究で示された日英語母語話者の事態の「捉え方の型」の違いは、あくまで発話を前提としたthinking for speakingのレベルにおけるものであることが示唆された。

最後に、本研究では、本研究の被験者となった言語の母語話者について、1) 自らの母語での事態の描写、2) 学習言語である日本語での描写、3) 日本語母語話者による日本語での描写を比較し、1) と3) での描き方に大きな傾向差が見られる場合に、2) が1) に近づくのか、すなわち、日本語母語話者の事態の「描き方の型」を習得するのかを検証した。結果は、特に〈人でない〉存在から〈人〉への働きかけ、またそれが物理的で状態変化を伴うような働きかけに関する事態である場合に、1) と3) の描写の型が大きく異なる傾向が強く、それらの画像を学習言語で描いた2) は日本語母語話者の描写1) に近づくことが明らかになった。すなわち、日本語学習者は、学習が進むにつれ、日本語母語話者の事態の「描き方の型」も習得していくということが強く示唆されたのである。

### 3. 成果活用について

本研究では、特に日本語母語話者と日本語学習者のそれぞれの母語での描写に大きな差が見られた画像を特定したが、それらの画像の特徴をさらに分析し、日本語母語話者の焦点のあて方を習得させるような絵教材の開発を今後行っていく予定である。

### 4. 今後の研究課題

今後の研究課題としては、本研究では検証に至らなかった東南アジアの諸言語の母語話者と日本語母語話者の「捉え方」の型の違いを明らかにすること、注意probe testとはまた異なった形で、発話を前提としない状態での事態の「捉え方」の型の違いを検証すること、さらに各言語の母語話者の事態把握の「型」が言語獲得のどの段階で形成されるのかについての検証などが挙げられる。また本研究では、それぞれの言語の話者の全体的な傾向の違いを検証したが、学習者ごとの特徴、あるいはその違いを生み出す要因などを明らかにする必要もあり、これらについて今後も引き続き調査、分析を行っていききたい。

## 研究成果報告

### 1. はじめに

各言語には、事態の描き方に関して好まれる「型」があることは古くから指摘されている。この事態の描き方の「型」とは、同じ事態を描く際に、どのような視点からその事態を捉え、その中のどの情報をより詳しく描くか、あるいは同じ情報を言語のどの要素で描くか、といった「傾向」のことであり、それらが言語によって大きく異なるのである（外山1973、国広1974、池上1981、Hinds・西光1986、Talmy2000、森田2002、金谷2004など多数）。

しかし、従来のこうした「型」に関する研究のほとんどは、小説などの対訳データ、あるいはコーパスにおける特定の表現の数量の比較を基にしており、1) 同じ事態に対する描写の比較ではなく、2) 比較される言語表現は、それが属する文脈の影響を受けてしまっていることなどから、純粋な事態の捉え方・描き方の比較とは言い難い。また、こうした「型」の研究で日本語が対象とされる場合は、ほとんどが英語（あるいは中国語、韓国語）との比較による分析であり、日本語教育の需要が非常に高い東南アジアの言語との対照による分析は管見の限り数少ない。

さらに、比較されている言語は限られているとはいえ多くの日本語における事態の描き方の「型」の研究が積み重ねられているにもかかわらず、こうした成果が日本語の教授に十分に生かされているとは言い難い（池上・守屋2009）。例えば、下記の画像はいずれも日本語教材中の受け身表現の導入の際に用いられるものであるが、日本語母語話者は、(1a) (2a) のように受け身を用いて描く者が多数を占めるものの、英語母語話者は、(1b) (2b) のように行為や力の働きかけ手（Agent）を主語に立て、受け身は用いずに描写をするものが多い。



図1

- (1) a. 女性がカバンを犬に取られそうになっている。  
b. The dog is taking her purse.

\* 本稿で報告する研究成果のうち、3.1節の内容については、ICLC14における口頭発表（タイトル「Comparison of Perspectives between English and Asian languages; Japanese, Chinese, Thai, Indonesian and Vietnamese」）を基にしており、4.1節の内容については日本言語学会（第153回大会）においての口頭発表（タイトル「日英語母語話者の事態の描き方の違いは事態の捉え方の違いの反映といえるか」）および同発表時からさらに被験者の数を増やし追調査を行った結果をまとめた伊藤（2018受理済）（「日英語母語話者における事態の描き方の型の違いと事態の捉え方の型の違い」『言語研究』154号）を基にしている。

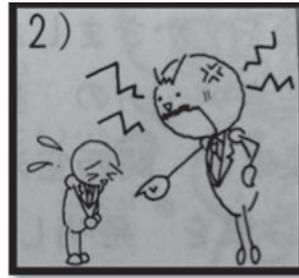


図2

- (2) a. 部下が上司に怒られている。  
b. Older person is yelling at the younger person,

絵教材には、このように意図した文型や表現が導けないものが多々あるが、その一つの原因として、学習者が当該の絵教材に描かれた事態を日本語母語話者とは異なった「型」で描いてしまうことがあると考えられる。したがって、様々な言語の話者が様々な事態をどのような「型」で描く傾向があるか、また日本語学習者が学習を進めるにしたがって、その「型」を獲得するのかを明らかにすることは、日本語教育に大いに資するものであると考える。

また多くの研究で明らかにされている各言語における事態の「描き方」の型が、事態の「捉え方」の型の違いであるかについても検証が必要であると考えられる。言語レベルで観察される事態の「描き方」の型から推測される事態の「捉え方」の型が、実際に認識レベルでの事態の「捉え方」の型であるとは限らないからである。

事態の描き方の背後に事態の捉え方がある（守屋2010<sup>1</sup>）ことを否定しているのではもちろんない。しかし事態の描き方から推測される事態の捉え方は、あくまで言語的なレベルにおいて、そのように捉えているように「見える」だけであり、実際にそのような事態の捉え方がなされているかは明らかではないのである。上記の図1や図2で言えば、確かに言語のレベルでは、英語母語話者は、行為や力の働きかけ手（Agent）に焦点をあてて捉えているように思われ、一方の日本語母語話者はその行為や力の受け手（Patient）に焦点をあてて捉える傾向があるように思われる。しかし、これはあくまで言語現象からそう「推測される」だけであって、実際に認識のレベルで、英語母語話者はAgentである〈犬〉や〈上司〉に焦点をあてやすく、日本語母語話者はPatientである〈女性〉や〈叱られている部下〉に焦点をあてやすいかは明らかではないのである。

## 2. 本研究の目的と調査の概要

こうした点に鑑み、本研究では、特に〈一方の参与者から他方の参与者へと何らかの働きかけがなされる事態〉を取り上げ、こうした事態を日本語母語話者、英語母語話者および（これまで事態の描き方の「型」に関する主な分析対象とされてこなかった）東南アジアの諸言語の母語話者が、それぞれどのように描く傾向があるのか、またその描き方の背後には、その描き

1 〈事態把握〉とは、人が言語化に先立って「事態」を各言語の母語話者に応じたやり方で行うと考えられる認知的な営みを指す。言語の話者によって好む仕方が異なるものであり、言語形式の選択にも大きく関わっている。（守屋2010：29下線筆者）

方から推測されるような認識の違いが実際にあるのか、などを、コーパスによる表現の数量的な比較ではなく、同一の画像に対するそれぞれの母語話者の描写の比較、および後述するその他の調査によって明らかにすることを目的とする。

本研究で用いたのは、下記のような何らかの行為や力の働きかけ手（以降「Agent」）にあたる参加者とその行為や力の受け手（以降「Patient」）にあたる参加者が描かれた画像である。

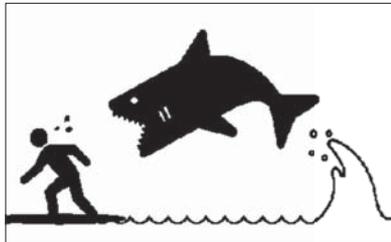


図3



図4



図5

調査では、1) 各言語の母語話者が、これらの画像をどちらの参加者に焦点をあてて描く傾向があるかを比較した。また2) 日本語学習者に学習言語である日本語でそれらの事態を描いてもらい、その描き方が日本語母語話者のそれと近づくかについても検証した。さらに、3) 同じ言語の母語話者を対象に、上記の画像に描かれた事態の「次」に起こった事態を想像してもらい、どちらの参加者を主語として描く傾向があるかも比較した。次の事態を描く際には、当該の事態で最も焦点をあてて捉えている参加者について描くのが自然と考えられ、ここから当該の言語話者が（言語のレベルではなく）認識のレベルで焦点をあてている参加者を明らかにする。さらに、この実験は、あくまで言語的な現象の観察を以て、認識のレベルでの焦点のありかを明らかにしようとするものであり、この認識のあり方の傾向（「捉え方の型」）も、あくまで思考・認識の一形態における傾向である可能性があることに鑑み、4) 発話を前提としない状態で、話者の注意バイアスを測定する probe test も行った。（上記1）～4）は全て異なる被験者を対象としている）。

### 3. 調査1 事態の描き方の型に関わる調査

#### 3.1. 英語・中国語・日本語母語話者の事態の描き方の型

本研究では同一の画像に対するそれぞれの母語話者の描写の比較を行ったが、まずその基盤となった伊藤・王（2016）の日本語・英語・中国語母語話者についての事態の描き方の「型」に関する調査について述べたい。同調査では、上記の図3～図5のような Agent にあたる参加者と Patient にあたる参加者が描かれた画像27枚について、日本語母語話者（62名）、英語母語話者（54名）、中国語母語話者（56名）にその内容を自由に描写させ、それぞれの話者がどちらの参加者に焦点をあてた描写を行うかを比較している。焦点があてられている参加者の同定については、主語として描かれていることをその基準としているが、これは主語として描かれる参加者は事態の中で最も認知的な際立ちが高い参加者であるという Langacker（1991）以降、特に認知言語学の領域で広く支持されている分析に基づいたものである（Tomline1997、尾谷2001、谷口2005、森山2005、小野寺2008など参照）。

調査では各画像に対する日中英語母語話者による描写を（ここでは、図3に対する描写を例

として挙げる)、(3a) (4a) (5a) のような Agent にあたる参加者を主語として描いているもの、(3b) (4b) (5b) のように Patient を主語とするが受け身を用いずに (すなわち、Patient であることを言語的に明示せずに) 描いているもの、(3c) (4c) (5c) のような、Patient を Patient として受け身を用いて描いているものの3つに分類し、それぞれの描写の割合を比較している (図6) (伊藤・王 (2016) では、それぞれ「AF (Agent Focus)」、「PF1 (Patient Focus1)」、「PF2 (Patient Focus2)」という名称で分類している<sup>2)</sup>。

- (3) a. サメが人間を食べようとしています。(AF)  
 b. サーフィン中にサメと遭遇してしまった。(PF1)  
 c. 男の人がサメに食われそうになっている。(PF2)
- (4) a. A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore. (AF)  
 b. The surfer tries to flee as fast as he can. (PF1)  
 c. A guy's about to get eaten by a shark. (PF2)
- (5) a. 鯊魚咬人。(AF)  
 b. 人在船上躲鯊魚。(PF1)  
 c. 人被鯊魚追。(PF2)

(伊藤・王 2016 : 31 下線筆者)

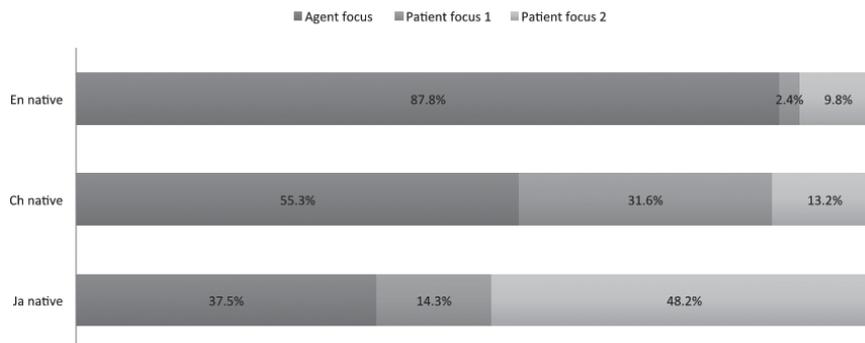


図6

英語母語話者は〈鯊〉に焦点をあてたAFの描写が9割近くを占めるのに対し、日本語母語話者は〈人〉に焦点をあてたPF1、PF2の描写が多い。また中国語母語話者の描写の割合は、ちょうどそれらの間の中間的な傾向で、〈鯊〉、〈人〉に焦点をあてた描写がほぼ同程度見られる。調査で用いられた27枚の画像のうち、各言語の描写のタイプの割合の差が有意であると判断されたものは、18枚 (66.7%) であるが、その多くが図6と同じような割合を示した。これらのことから、同じ事態であっても、英語母語話者はAgentに焦点をあてて描く傾向が強く、中国語母語話者、日本語母語話者の順でその傾向が弱まる、言い換えればPatientに焦点をあて

2 伊藤・王 (2016) では、「Agent」「Patient」という用語は、特に動作や力の働きかけが行われる事態において、それぞれ前者は〈Action Chainの始点にあたる参加者〉、後者は〈Action Chainの二番目にあたる参加者〉という意味で用いられており、本研究でもこの定義に従う。例えば(4b)のSurferは、逃げようという動作を行っている、という意味では動作主 (Agent) ということもできるが、本研究では、あくまで動作や力の働きかけ手という意味でのみAgentという用語を用いる。

た描写に傾く、ということが明らかにされた。以下にもう一例だけ示しておく。

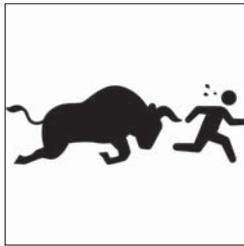


図7

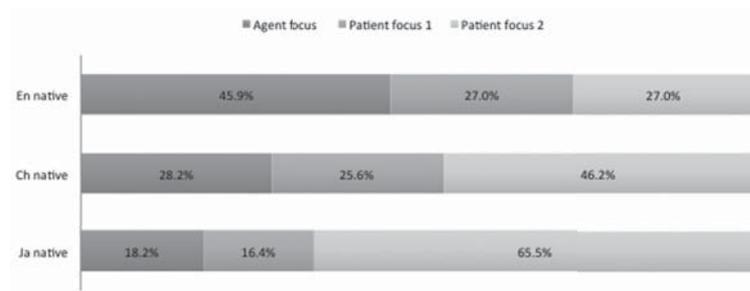


図8 ( $\chi^2(4) = 14.103, p < 0.1$ )

- (6) a. 牛が人を追い回している。  
 b. 男の人が闘牛から逃げています。  
 c. 猛牛に男性が追いかけている。
- (7) a. A bull is chasing a man.  
 b. A man is running away from a bison.  
 c. A man is being chased by a bull.
- (8) a. 鬥牛追著一個男生。  
 b. 參加西班牙鬥牛節活動。  
 c. 被牛追。

伊藤・王 (2016: 32 下線筆者)

### 3.2. インドネシア・タイ・ベトナム語母語話者の事態の描き方の型

本研究では、これらの事態の描き方の型が、日本語教育の需要の高まる東南アジアの母語話者についてはどのようなものであるかを検証するために、インドネシア語母語話者 (62名)、タイ語母語話者 (59名)、ベトナム語母語話者 (50名) について同様の調査を行った。以下がそれぞれの母語話者の図3についてのAF、PF1、PF2の典型的な描写例である。

#### 【インドネシア語】

- (9) a. Seekor hiu mencoba menangkap manusia. (AF)  
 A shark try capture human
- b. Orang berusaha menyelamatkan diri dari hiu. (PF1)  
 person attempted save self from shark
- c. Peselancar di serang hiu. (PF2)  
 Surfers PASSIVE attacked shark

#### 【タイ語】

- (10) a. ฉลาม จะ กิน นักโต้คลื่น. (AF)  
 Shark FUTURE eat surfer
- b. คน กำลัง หลบ ปลาฉลาม. (PF1)  
 Person PRESENT CONTINUOUS escape shark

c. เขา กำลังจะ ถูก ปลาฉลาม กัด. (PF2)  
 He going to PASSIVE shark bite

【ベトナム語】

- (11) a. Cá mập đang cắn người. (AF)  
 Shark PROG eat human
- b. Lướt biển gặp cá mập. (PF1)  
 Surfing sea meet shark
- c. Một người đang bị một con cá mập đuổi. (PF2)  
 a human PROG PASSIVE a shark chase

上記の分類を行い、それぞれの母語話者別に描写の割合を比較したものが以下である。

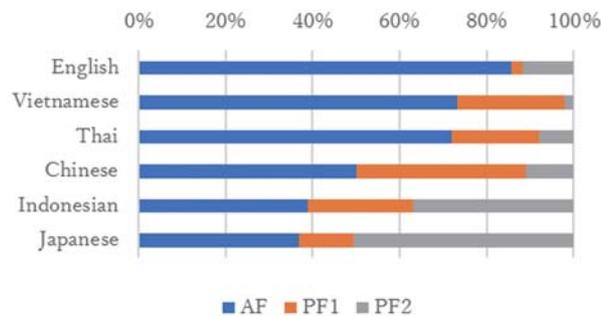


図9

上記の描写の割合は、Agentに焦点をあてた描写（AF）の割合が高い言語の順で並べてあるが、興味深いことに、英語母語話者と日本語母語話者の間に東南アジアの諸言語の母語話者が挟まれる形になっており、この傾向は他の画像の描写についても多く見られる。以下に、同様の傾向を見せた画像と描写の割合を示す（例文は割愛）。



図10

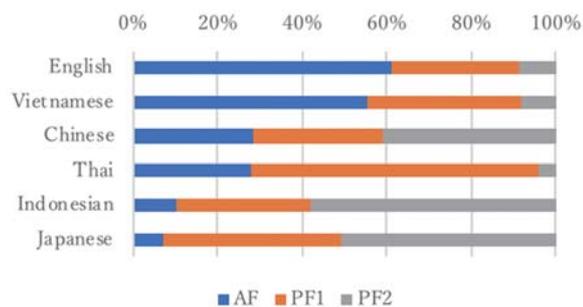


図11

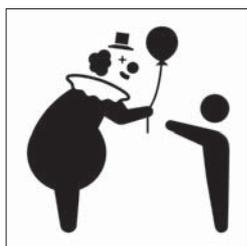


図12

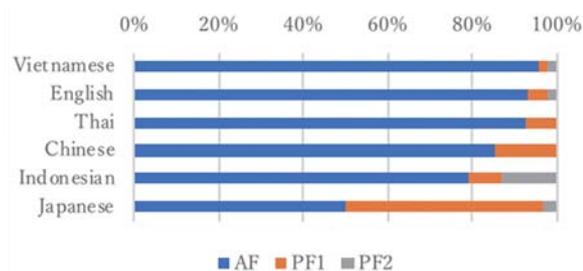


図13



图 14

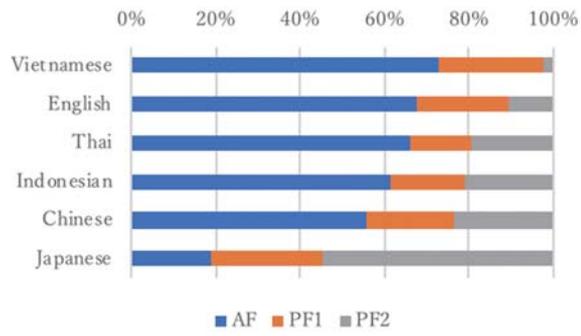


图 15



图 16

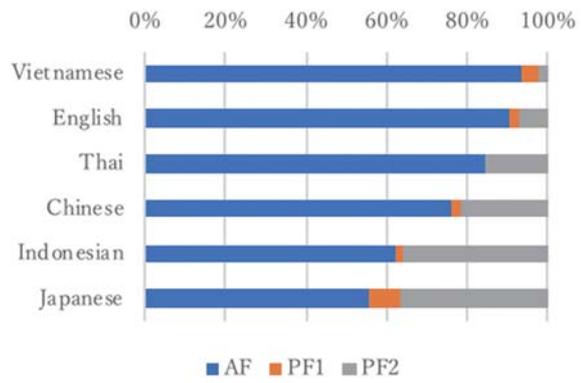


图 17



图 18 (再掲)

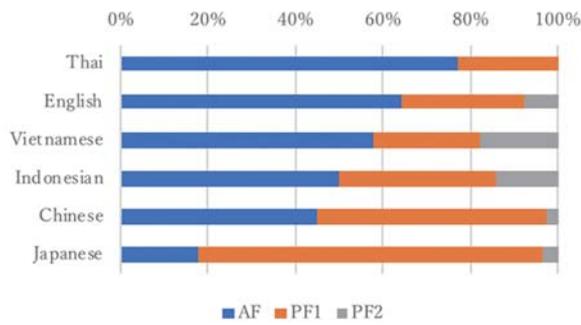


图 19



图 20 (再掲)

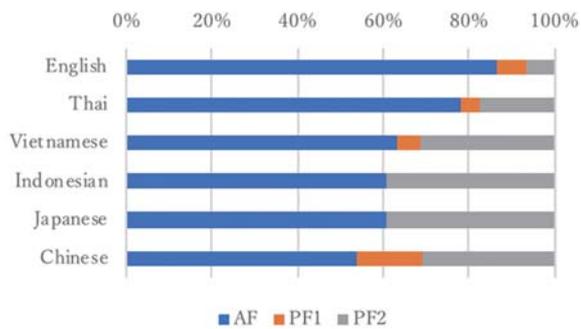


图 21



図22

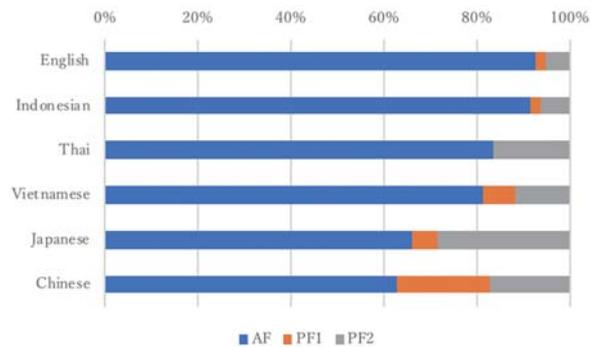


図23

いくつかの画像においては、ベトナム語母語話者やタイ語の母語話者の描写のほうが、英語母語話者よりもAFの割合が高かったり、逆に日本語母語話者の描写より中国語母語話者の描写のほうが、AFが少なかったりするが、おおよそ英語母語話者が最もAgentに焦点をあてた描写をしやすい傾向にあり、それに続き東南アジアの言語、中国語、そして日本語という順番でその傾向が弱まり、逆にPatientに焦点をあてた描写が多くなる。

筆者らは、上述の伊藤・王（2016）において、日本語および日本語母語話者でPatientに焦点をあてた描写が多くなるのは、これらの言語が「主題優勢型言語」であることにその原因が求められる可能性を示しているが、同じく主題優勢型言語であるとされるベトナム語・タイ語・インドネシア語（高橋（2006）峰岸（2012）など参照）においても、Patientに焦点をあてた描写が（主語優勢型言語である）英語よりも多くなるという上記の結果は、その主張と軌を一にする結果であり、伊藤・王（2016）の分析を支持するものと言える。

#### 4. 調査2 事態の捉え方の型に関わる調査

次に、本研究では上記のような描き方の型の違いが、「言語」のレベルにのみ見られる違いなのか、あるいは両言語母語話者の「認識」のレベルにおいても見られる（すなわち、捉え方の型の）違いなのか、について検証を試みた。

##### 4.1. 「次」の事態を描く調査1（日本語・英語母語話者）

調査は、二段階で行った。まず描き方の「型」の違いが最も顕著に見られた英語母語話者（49名）と日本語母語話者（51名）を対象に、上記の伊藤・王（2016）の調査で用いられた画像のうち15枚<sup>3</sup>について、それらの画像に描かれている事態の「次」に何が起こったかを想像し、それぞれの母語でその事態を描いてもらった。示された事態の次の事態を想像して描く際には、そ

3 伊藤・王（2016）の調査では27枚の画像が用いられているが、これらの全ての画像について描写を行うのは被験者の負担になることが予想されたことから、これらを約半数の15枚に絞って調査を行った。特に、描かれている事態がどのようなものか分かりにくいと思われるもの（例：蹴りを放っているように見える画像だが、踊っているとも捉えられかねないものなど）、あるいはAgent、Patientの一方が大きく描かれていることで、そちらの際立ちが高くなってしまっている可能性があるものなどを中心に省いた。また15枚には、ダミーとして、参加者が一つしか描かれていないものが2枚含まれている。

の事態の参与者の中で最も焦点をあてて捉えているものについての描写になることが予想されるからである。すなわち、次の事態の描写において主語として描かれる参与者から、その事態の中で最も焦点を当てて捉えられている参与者を明らかにすることができると考えられるのである。

例えば、図24の事態を、英語母語話者がAgentである〈鮫〉に焦点を当てて捉える傾向があるならば、その次の事態を想像する際にも、その〈鮫〉に焦点を当てた(12)のような描写が多くなるはずであり、一方、日本語母語話者がPatientである〈人〉に焦点を当てて捉える傾向があるならば、(13)のような描写が多くなることが予想される(例文は実際の調査において得られた描写である)。

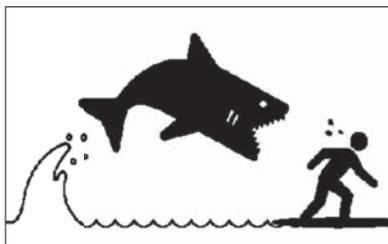


図24 (再掲)

【Agentに焦点】

- (12) a. The flying shark knocks the man off the surfboard.
- b. The shark bites the man's leg and throws him into the ocean.

【Patientに焦点】

- (13) a. 逃げ切れなかった男性は、サメに食べられました。
- b. ギリギリでサメから逃げる事ができた。

調査は、15枚の画像を提示し、想像した次に起こる事態をキーボードで入力してもらう形で行った。画像はランダムな順で提示され、またAgentと〈受け手〉の位置が左右に偏らないように、下記のように、左右に反転された画像のどちらかが、こちらもランダムに提示された(本稿では、以下の図26以外全てAgentが左にある図に統一して示す)。

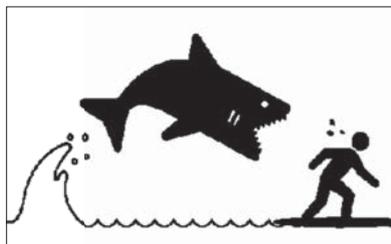


図25 (再掲)

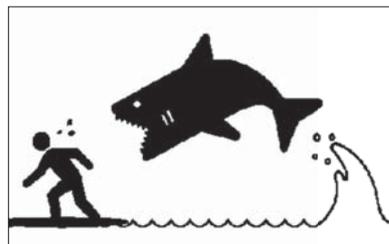


図26

被験者の日本語母語話者は、日本の私立大学生35名、社会人16名の合計51名、英語母語話者は、アメリカ人27名、イギリス人11名、ニュージーランド人2名、オーストラリア人1名、国籍記入なし8名(ただしアメリカまたはイギリスのいずれか)の大学生49名である。異なる国籍の英語母語話者を被験者としたのは、できるだけ文化的な影響を排除し、英語という言語

の母語話者の捉え方の型を見るためである。調査で得られた描写文は、上記の(12)(13)のようにAgentにあたる参加者、Patientにあたる参加者のいずれを主語に立てて描いているかを基準に分類を行った。

結果は、まず全体的な傾向として両言語の母語話者とも画像に描かれている事態を描く際に比べると、次の事態を想像して描く際にはPatientを主語に立てる傾向が強く出た。これは、ダミーを除く全ての画像が、片方の参加者からもう片方の参加者への働きかけが描かれている事態であることを考えると自然なことであると思われる。当該の働きかけの結果、何らかの影響を被るのは、まずPatientの側と考えられるからである。例えば、殴った側の参加者と殴られた側の参加者がいる場合、前者の行為があってその行為が後者に伝達されるわけであるから、この行為連鎖の流れを考えるならば、次の事態を描く際には後者の殴られた側がどうなったか(e.g. 〈倒れる〉〈血を流す〉など)を描くのが認識の流れとしては自然であろうと思われるのである。

例えば、図27の画像について画像に描かれた事態を描写した場合と、描かれた事態の「次」の事態を描写した場合を比べると、前者では、英語母語話者の87.8%がAgentである〈鮫〉を主語に立てたのに対し、後者では、その割合が36.6%に減少している。日本語母語話者の描写も同様に、37.5%から23.9%へとその割合は減少している(図28、図29)。

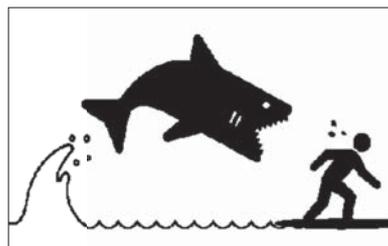


図27 (再掲)

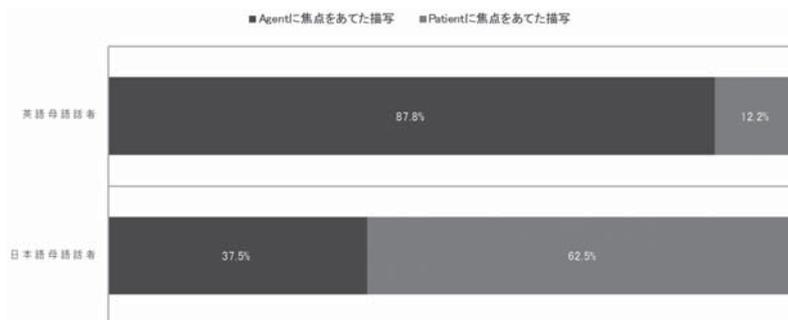


図28 【図27に描かれた事態を描写】

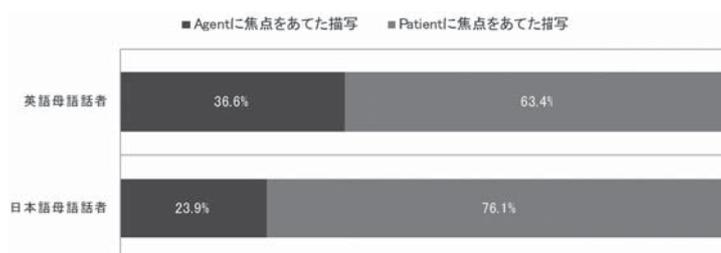


図29 【図27に描かれた事態の「次」の事態を描写】

しかし、非常に興味深いことに、このような傾向が認められても、やはり英語母語話者が Agent を主語に立てる割合は、日本語母語話者のそれよりも高いのである。そしてその傾向は 15 枚の画像のうち、11 枚に見られた (15 枚のうち、2 枚はダミーとして参加者が一つしか描かれていない画像であるため、実質的には 13 枚のうち 11 枚にその傾向が認められた)。

以下に画像とともにそれらの描写の例を示す。Agent に焦点をあてた描写と、Patient に焦点をあてた描写のそれぞれを 2 文ずつ例示し、日本語・英語母語話者の中でそれらの割合を示してある。最初の 6 枚は両言語母語話者の描写の割合が統計的にも有意に異なるものである。



図30

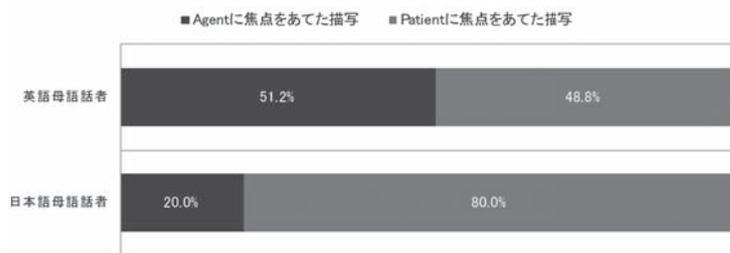


図31 ( $\chi^2(1) = 9.358, p < 0.1$ )

【Agentに焦点】

- (14) a. The policeman shoots the man in the head.
- b. The officer puts away the gun and handcuffs the criminal.
- c. 無事警官は脱獄犯を逮捕できた。
- d. 警察は銃で脅して手錠をかけました。

【Patientに焦点】

- (15) a. The man will be handcuffed and taken to prison.
- b. The criminal will be arrested and questioned.
- c. 手を付いていた男性が拳銃を蹴り上げ、逃げ出します。
- d. 逮捕されパトカーに乗せられる。

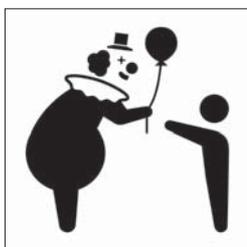


図32 (再掲)

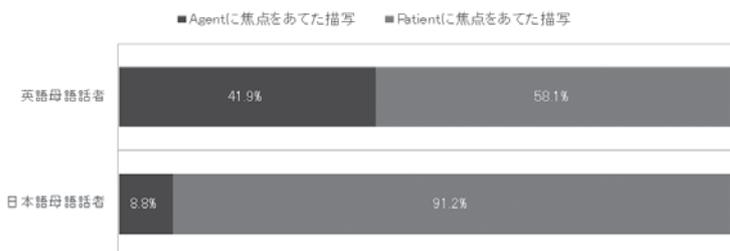


図33 ( $\chi^2(1) = 10.448, p < 0.1$ )

【Agentに焦点】

- (16) a. The clown will give the boy a balloon.
- b. A clown makes a balloon animal for a child.

- c. ピエロはそのまま風船で飛んでいきました。
- d. ピエロは子供に渡す前に風船を割りました。

【Patientに焦点】

- (17) a. The kid will go off happily playing with the balloon.
- b. The child accidentally lets the balloon go and begins crying.
- c. ピエロから風船をもらった男の子は、嬉しそうに帰っていきました。
- d. 「ありがとう」と言って風船を受け取り帰る。

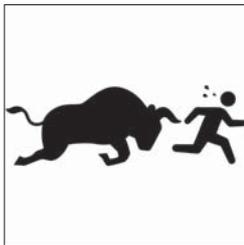


図34 (再掲)

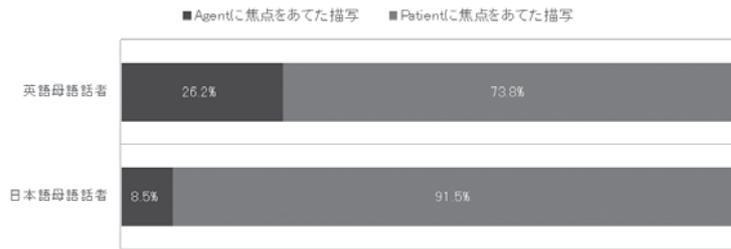


図35 ( $\chi^2(1) = 4.947, p < 0.5$ )

【Agentに焦点】

- (18) a. The bull will gore the man to death.
- b. Bull catches up to runner.
- c. 牛は町外れまで追いかけてきました。
- d. 牛が壁に突き刺さった。

【Patientに焦点】

- (19) a. The man escapes the charging bull in the nick of time by leaping onto a high wall.
- b. The man will be attacked by the bull and will end up in the hospital.
- c. 観客席に逃げ込み助かる。
- d. 男性は牛に追いつかれ、大怪我を負います。

紙面の省略のため、以下の画像については、Agent、Patientのそれぞれに焦点をあてた描写の割合のみを示す（いずれも日英語母語話者の間で描写の割合が統計的に有意に異なる）。



図36

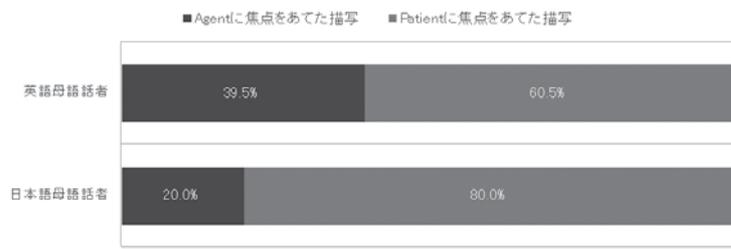


図37 ( $\chi^2(1) = 4.031, p < 0.5$ )



図38

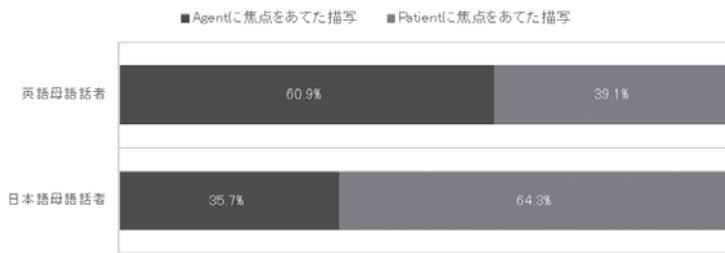


図39 ( $\chi^2(1) = 5.560, p < 0.5$ )



図40

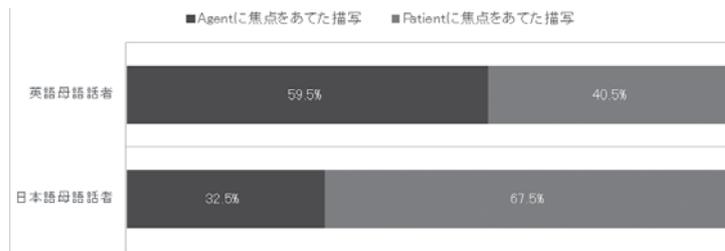


図41 ( $\chi^2(1) = 6.017, p < 0.5$ )

上記の例は、全て英語母語話者が日本語母語話者に比べて、Agentを主語に立てる割合が統計的に有意に高い例である。さらに以下の例についても、その差は統計的に有意な差ではないが、やはり英語母語話者のほうがAgentを主語に立てて描く割合が高くなっている。

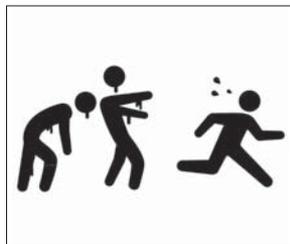


図42 (再掲)



図43



図44

13枚の画像のうち、日本語母語話者のほうが英語母語話者よりも高い割合でAgentを主語に立てたのは以下の2枚のみであった。



図45 (再掲)



図46 (再掲)

本調査では、上記図45、図46の2例を除き、13枚のうち11枚、つまり全体の85%の画像において英語母語話者のほうが日本語母語話者よりもAgentを主語に立てて次の事態を描く割合

が高いという結果であった。

このように、英語母語話者のほうが日本語母語話者よりも **Agent** を主語に立てて次の事態を想像している割合が高いということは、両母語話者が同じ事態を異なった焦点のあて方で「捉えている」可能性が十分に示されたものと思われる。すなわち、英語母語話者は **Agent** に焦点をあてて事態を「描く」だけでなく、認識のレベルでもそのように事態を「捉える」傾向があるということであり、日本語母語話者についても、その「描き方」、「捉え方」の両方で、**Patient** に焦点をあてる傾向が英語母語話者より強いと考えられるのである。

#### 4.2. 「次」の事態を描く調査2（インドネシア・タイ・ベトナム語母語話者）

上記の調査結果を受け、次に東南アジアの諸言語の母語話者にどのような事態の捉え方の傾向が見られるかについて検証を行った。調査方法は上記と同様である。すなわち、画像に描かれている **Agent** にあたる参与者、**Patient** にあたる参与者のいずれを主語に立てて描いているかを基準に描写を分類し、その割合を日本語および英語母語話者と併せて比較した（被験者はタイ語母語話者71名、ベトナム語母語話者50名、インドネシア語母語話者50名、日本語母語話者50名、英語母語話者49名である）。

結論から述べると、東南アジアの諸言語については、日英語母語話者の間に見られたような統計的に有意な描写の傾向の違いは見出だせなかった。これは、先にも指摘したように、「次」の事態を描く際には、時間的な経過、力の伝達の順序といった点から、全体的に **Patient** が次にどうなったかを描く描写に偏り、**Agent** 焦点、**Patient** 焦点の描写の差が縮まってしまったことによるものと思われる。**Agent**、**Patient** のいずれに焦点をあてて描くかについて、最も大きな差のある日英語母語話者の間であっても、全体的な **Patient** 焦点への傾倒により両言語の差が縮まってしまう、その差が見えにくくなってしまうのであって、もともと日英語母語話者のちょうど中間的な描写の傾向を示していた（つまり日英語母語話者の間に見られるほどには大きな描写の違いが見られない）東南アジアの諸言語の「次」の事態の描写では、さらにその差が縮まり、描写の傾向に統計的に有意な違いが見出だせなかったのである。

図48は、図47の「次」に何が起こったかについての各言語母語話者の描写の割合を示したものであるが、残差分析を行った結果、英語母語話者において **Agent** に焦点をあてた描写が統計的に有意に多く、日本語母語話者による **Agent** に焦点をあてた描写が有意に少ないという結果であったが、インドネシア語、タイ語、ベトナム語についてはいずれも **Agent** に焦点をあてた描写が有意に多い、あるいは少ないと言えるほどの違いは出なかった。



図47

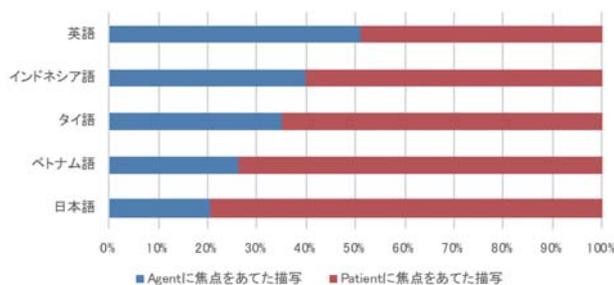


図48

図49についても、描写の数、その割合としては、予想した通りの結果なのであるが、英語母語話者のAgentに焦点をあてた描写の割合は他の言語話者の描写と比べて統計的にも有意に多いが、東南アジアの諸言語のAgentに焦点をあてた描写が日本語母語話者のそれと比べて多いことは、統計的にも有意な差としては出ていない。図51についても、いずれの母語話者の描写の割合においても、Agentに焦点をあてた描写が有意に多い、あるいは少ないと言えるほどの違いは見出だせなかった。



図49

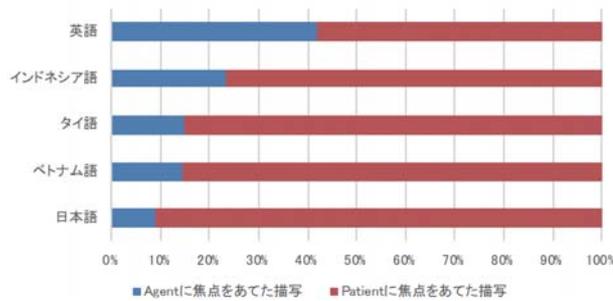


図50

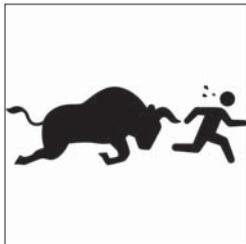


図51

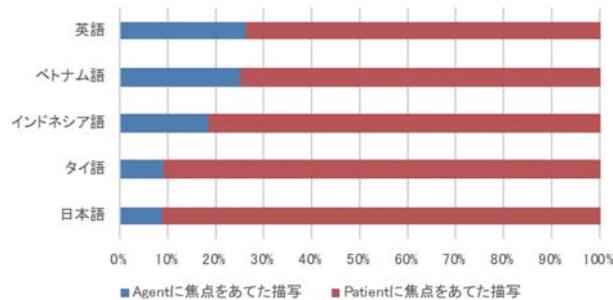


図52

他の画像についても同様に、次の事態についての描写がそもそも全体的にPatientに偏ったものになってしまうがゆえに、描写の傾向差が日英語母語話者ほどは大きくない東南アジアの諸言語については、統計的にも有意な程度には捉え方に差があるという結果は見出だせなかった。

#### 4.3. 注意probe test

ここまで、1) 英語母語話者は日本語母語話者に比べてよりAgentに焦点をあてた描写を行う傾向にあること、2) インドネシア語、ベトナム語、タイ語の母語話者も、英語母語話者ほどではないが、日本語母語話者よりもAgentに焦点をあてる傾向が強いこと、3) 日英語母語話者については、「次」の事態を想像し描写する調査により、こうした事態の「描き方」の型の違いが、事態の「捉え方」の型の違いに根ざしている可能性があること、4) 東南アジアの諸語の母語話者については、2) が「捉え方」の型に根ざすものなのかについては、上記調査では明らかにできなかったこと、について述べてきた。

4) について上記の調査結果からは有意な差を見出だすことができなかったが、本研究ではこの「捉え方の型」の違いについて、3) に追加調査を行うことで、異なった方向からの考察を加えた。この調査は、3) が、あくまで言語的な現象の観察を以て認識のレベルでの焦点のありかを明らかにしようとするものであり、Slobin (1987) が指摘するように、この認識のあ

り方の傾向（「捉え方の型」）も、あくまで思考・認識の「一形態」における傾向である可能性がある、ということに鑑みて行ったものである。すなわち、上記調査で確認される話者の「捉え方の型」は、発話を前提とした際の、すなわち「話すための特定の思考法（thinking for speaking (Slobin 1987)）」である可能性があるのである。そこで本研究では、この発話を伴う場合の事態の捉え方と発話を伴わない状態での事態の捉え方に違いがあるという可能性に鑑み、発話を前提としない状態での注意バイアス（焦点のあり方）を測定する probe test を行った。テストの手順は以下の通りである。

まず、上記で用いた15枚の画像に加え、さらに Agent と Patient からなる事態を描いた画像を加え、合計23枚（うちダミーは3枚）の画像を用意した（コンマ0秒以下の反応時間を計測する調査であるため、信頼性を上げるため）。被験者はまず画像が提示されている間、できるだけその事態を詳しく記憶することを求められる（この記憶という行為はこの調査には直接関係しないが画像への集中力を増してもらおう目的で指示してある）。画像が提示されるのは3秒間で、その後、画像は画面上から消えるが、画像が消えた後に、Agent または Patient の映っていたどこかに赤い点が表示される。被験者は、その点が映っている側がどちらであるかをできるだけ早く判断し、「RIGHT」、「LEFT」のボタンをクリックすることが求められる<sup>4</sup>（図53、図54参照）。赤い点が、Agent 側に現れる画像が10枚、Patient 側に現れる画像も10枚である。また画像は左右反転されたものがランダムに表示される。画像の表示の順もランダムである。

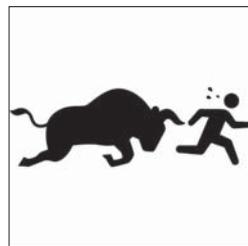


図53

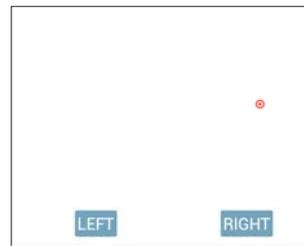


図54

調査では、被験者が、赤い点が Agent 側に表示された場合、Patient 側に表示された場合のいずれに早く反応する傾向があるのか、またその違いに日英語母語話者で有意な差が見られるのかを見た。仮に事態の描き方から推測されるような事態の捉え方の違いが日英語母語話者間に見られるのであれば、英語母語話者は、Agent 側により焦点をあて事態を眺めているはずであり、そちら側に点が表示された場合のほうがより短い時間で反応し、日本語母語話者は、Patient 側に表示された場合のほうが反応時間が短い、という結果になることが推測される<sup>5</sup>。調査対象は、日英語母語話者、それぞれ15名ずつである（被験者は、上述の実験のいずれにも参加していない）。

- 
- 4 クリックした後は、必ずカーソルを中央に戻す。この作業については、プレテストで練習を行い、また調査本番でもカーソルを中央に戻しているかをチェックしている。
- 5 まれに被験者がクリックをする際に、クリックがうまく反応せず、実際の反応時間よりも長くかかってしまったものがあるが、これらについては、個々人の平均の反応速度から見て、明らかに反応時間が長すぎるようなデータについては、箱ひげ図（box plot）を作成し、「外れ値」として除外した上で統計処理を行った。

下記は、20枚の画像についての日英語母語話者の反応時間の平均、その差、また反応速度の平均の差が統計的に有意な差と言えるか、(対応のない) t検定を行った結果である。

表1

画像	ドットの表示位置	カテゴリ名	反応時間の平均	差	標準偏差	母平均の差の検定			信頼区間(上段:95%、下段:99%)			
						統計量	自由度	p値	判定	下限	上限	±値
画像1	Patient側に表示	Ja native	1.3829	0.2847	0.3833	2.079	10	0.064	[]	-0.02045	0.589764	0.305106497
		En native	1.0982		0.1775					-0.14932	0.718636	0.433977672
画像2	Agent側に表示	Ja native	1.2283	0.0583	0.2629	0.655	24	0.519	[]	-0.1255	0.242146	0.18382471
		En native	1.1699		0.1901					-0.19079	0.307436	0.249114275
画像3	Patient側に表示	Ja native	1.1355	-0.0316	0.2407	0.354	25	0.727	[]	-0.21546	0.152302	0.183879234
		En native	1.1671		0.2218					-0.28044	0.21729	0.248867185
画像4	Patient側に表示	Ja native	1.2157	0.1093	0.3335	1.079	17	0.296	[]	-0.10442	0.323005	0.213712239
		En native	1.1064		0.1599					-0.18428	0.402866	0.293574159
画像5	Agent側に表示	Ja native	1.1123	-0.0071	0.2081	0.095	27	0.925	[]	-0.16083	0.146644	0.153734531
		En native	1.1194		0.1944					-0.21469	0.205004	0.207594946
画像6	Agent側に表示	Ja native	1.1806	0.0399	0.2419	0.563	18	0.581	[]	-0.10896	0.188677	0.148820025
		En native	1.1408		0.1083					-0.16404	0.243753	0.203895992
画像7	Agent側に表示	Ja native	1.1048	-0.0307	0.2093	0.415	26	0.882	[]	-0.18279	0.121394	0.152091912
		En native	1.1355		0.1823					-0.2363	0.174904	0.205601534
画像8	Patient側に表示	Ja native	1.1570	0.0181	0.3333	0.162	27	0.873	[]	-0.21206	0.248348	0.230206584
		En native	1.1389		0.2640					-0.29271	0.329	0.310857394
画像9	Patient側に表示	Ja native	1.1111	-0.0219	0.2713	0.271	22	0.789	[]	-0.18954	0.145674	0.167607106
		En native	1.1330		0.1561					-0.24974	0.205874	0.227807358
画像10	Agent側に表示	Ja native	1.1940	0.1149	0.2563	1.546	17	0.140	[]	-0.04185	0.271583	0.156716827
		En native	1.0791		0.1113					-0.10041	0.330147	0.215280186
画像11	Agent側に表示	Ja native	1.0931	-0.0307	0.2149	0.406	26	0.688	[]	-0.18618	0.124757	0.155470012
		En native	1.1238		0.1802					-0.24088	0.179455	0.210168132
画像12	Patient側に表示	Ja native	1.0907	-0.0357	0.2410	0.446	28	0.659	[]	-0.19988	0.128411	0.16414467
		En native	1.1264		0.1955					-0.25716	0.185695	0.221428052
画像13	Agent側に表示	Ja native	1.1424	0.0126	0.2886	0.152	21	0.881	[]	-0.1597	0.184899	0.172298853
		En native	1.1298		0.1443					-0.22198	0.247182	0.234581742
画像14	Patient側に表示	Ja native	1.0507	-0.0422	0.2109	0.564	25	0.578	[]	-0.19647	0.112001	0.154237173
		En native	1.0929		0.1779					-0.25099	0.168513	0.208748989
画像15	Patient側に表示	Ja native	1.0311	-0.0221	0.2120	0.330	27	0.744	[]	-0.15978	0.115536	0.13785983
		En native	1.0533		0.1453					-0.20801	0.163765	0.185888523
画像16	Agent側に表示	Ja native	1.0489	-0.0539	0.2179	0.805	28	0.427	[]	-0.19086	0.083124	0.136990355
		En native	1.1027		0.1401					-0.23866	0.130931	0.184797396
画像17	Patient側に表示	Ja native	1.1085	-0.0276	0.2787	0.321	28	0.750	[]	-0.20347	0.148271	0.175871474
		En native	1.1371		0.1814					-0.26485	0.209647	0.237247289
画像18	Patient側に表示	Ja native	1.1267	0.0110	0.2516	0.131	28	0.896	[]	-0.16038	0.182385	0.171384641
		En native	1.1157		0.2042					-0.22019	0.242195	0.231194636
画像19	Agent側に表示	Ja native	1.0697	0.0015	0.2037	0.020	28	0.984	[]	-0.14879	0.15172	0.150253
		En native	1.0683		0.1980					-0.20122	0.204155	0.202688453
画像20	Agent側に表示	Ja native	1.0779	-0.0752	0.2149	1.003	28	0.325	[]	-0.22882	0.078417	0.153617443
		En native	1.1531		0.1954					-0.28243	0.132027	0.207227022

反応時間の平均において、上記の予想の通りとなった(すなわち、英語母語話者はAgent側に点が表示された場合のほうがより短い時間で反応し、日本語母語話者は、Patient側に表示された場合のほうが反応時間が短い)。画像は、11画像で全体の約半分であり、残りの9画像については推測とは逆の結果であった。またそれらの反応時間の差も統計的に有意な程度に異なるとは言えなかった。この結果から、(もちろん本実験のみから断定することはできないが)、少なくとも反応時間という形では、日英語母語話者の間に、Agent、Patientに対する焦点のあて方の違いは現れず、日英語母語話者の間には、発話を前提とした場合には、事態の捉え方に違いが見られるが、発話を前提としない場合には必ずしもその限りではないという可能性が示された(このことは換言すれば、発話を前提した場合と前提としない場合で、事態の捉え方が異なる可能性があるということでもある)。

## 5. 調査3 事態描写の「型」の習得に関わる調査

最後に、本研究の締めくくりとして事態の描き方の型の「習得」についての調査結果について報告する。前節までに、事態の「捉え方の型」について、1) 日英語母語話者の間には、少なくとも発話を前提とした場合には違いが見られること、2) 東南アジアの言語の母語話者との間には、違いは見られるものの統計的に有意な差ではないことを見てきたが、今回の調査対

象となった言語の母語話者については、少なくとも母語における事態の「描き方の型」については違いが見られることは先述の通りである。したがって（事態の「描き方」の型の違いの背後に事態の「捉え方」の違いがあろうとなかろうと）、これらの言語母語話者が日本語を学ぶ際には、より自然な日本語の習得を目指すのであれば、その「描き方」の型については習得する必要があるということである。この描き方の型の習得という点について、インドネシア語、タイ語、ベトナム語および英語を母語とする日本語学習者が、日本語で事態を描いた際に、日本語母語話者の事態の描き方に近づくのかを調査した。

被験者は、日本語学習者である<sup>6</sup>、インドネシア語母語話者（72名）、タイ語母語話者（50名）、ベトナム語母語話者（42名）、英語母語話者（44名）で、彼らに4.1節で用いた15枚の画像に描かれた事態を学習言語である日本語で描写してもらった。それぞれの描写を、3.1節と同じ基準で、AF、PF1、PF2に分類した。下記に図55の事態に対する各言語話者の描写の例を示す。

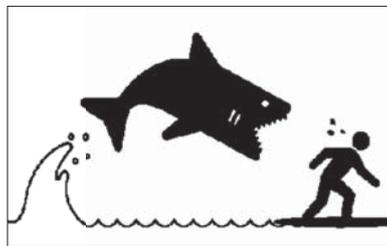


図55（再掲）

【インドネシア語母語話者】

- (20) a. サメが水から飛び出して人を襲う。(AF)  
b. サーファーはサメから急いで逃げていきます。(PF1)  
c. 男の人がサメに攻められます。(PF2)

【タイ語母語話者】

- (21) a. サメが海から飛んで人を食べようとする。(AF)  
b. あの子は飛んでいるサメに怖がっている。(PF1)  
c. 男の子はサメに食べられちゃう。(PF2)

【ベトナム語母語話者】

- (22) a. サメがサーフィンしている人をアタックする。(AF)  
b. 男の子はサメから逃げようとする。(PF1)  
c. 男の子は魚に脅かされた。(PF2)

6 日本語能力試験N2取得程度以上の日本語学習者を対象とした。調査時に本調査が当該レベルの学習者を対象とすることを伝え、日本語能力試験に合格したものはそのレベルを記入、また収集したデータの中で明らかに日本語レベルがN2に達していないであろうと判断されるものは分析対象から省いた。

【英語母語話者】

- (23) a. サメがいきなり海から飛んできて、人間を食べるようにしています。(AF)
- b. サーフしてる人は鯨から逃げようとしています。(PF1)
- c. 人は鯨に食べられるそうだ。(PF2)

学習者による描写ゆえ、文法的な誤りがある例も少なからずあったが、(24) のように助詞の誤りなどがあっても、明らかにAgentあるいはPatientのいずれかを主語と立てていることが推測されるものは分類に含め、(25) のように、いずれか判断しかねるものについては分類から除外した。

(24) サメを人を食べるところです。

(25) サメはサーフィンする人に襲われます。

これらの分類を、日本語母語話者の日本語による描写およびそれぞれの母語での描写の間で比較し、学習言語である日本語での描写が、日本語母語話者による日本語での描写に近づくのかを検証した。下記に図53に対するそれぞれの母語話者の描写の割合を比較したものを示す。例えば、図56はベトナム語母語話者を対象にした調査で、上から順に1) 日本語母語話者の日本語による描写 (Ja in Ja)、2) ベトナム語母語話者による日本語での描写 (Viet in Ja)、3) ベトナム語母語話者によるベトナム語での描写 (Viet in Viet) における、AF、PF1、PF2の割合が示されている。図57はタイ語母語話者、図58はインドネシア語母語話者、図59は英語母語話者による同じ比較である。

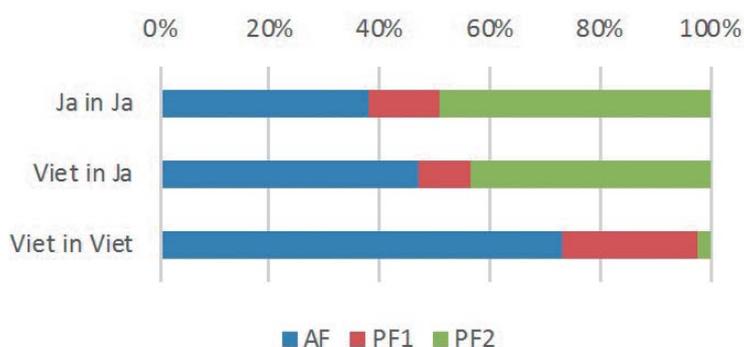


図56 ベトナム語母語話者と日本語母語話者の描写の比較

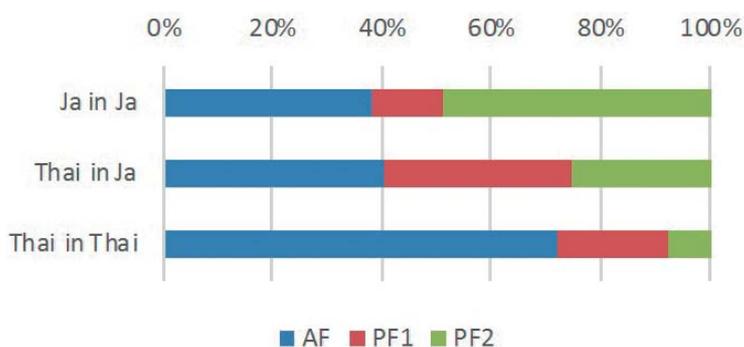


図57 タイ語母語話者と日本語母語話者の描写の比較



図58 インドネシア語母語話者と日本語母語話者の描写の比較



図59 英語母語話者と日本語母語話者の描写の比較

インドネシア語母語話者の例のように（図58）、自らの母語での描写と日本語母語話者による日本語での描写が同じような割合を示す場合には、学習言語である日本語での描写が日本語話者のそれへと近づいたのかどうかは判断が難しい。しかし、図56、図57および図59に示したベトナム語、タイ語、英語母語話者の場合のように、それぞれの母語で描いた場合と日本語母語話者の描写が大きく異なる場合には、学習言語での描写においてはAF、PF1、PF2の割合が日本語母語話者のそれに近づいていることが見て取れる。すなわち日本語母語話者はAFの割合が比較的少なく、PFに描写が偏る傾向にあるが、ベトナム語、タイ語、英語母語話者は、それぞれの母語ではAFの占める割合が高かったのが、日本語で描く場合にはAFの割合が下がり、その分、PF1あるいはPF2の割合が増え、日本語母語話者の描写の型に近くなるのである。

今回の調査では、日本語母語話者による描写と学習者の母語での描写について、AF、PF1、PF2の割合を比較すると、タイ語母語話者による一枚の画像を除き、全て統計的に両者は有意に異なっていたため、日本語母語話者による描写におけるAFの割合と、各言語母語話者の描写におけるAFの割合の間に20ポイント以上の差があるものを、日本語母語話者の描き方の型と自らの母語での描き方の型が大きく異なる画像と判断した。例えば、図56で言えば、日本語母語話者のAFの割合は、38.1%で、ベトナム語母語話者がベトナム語で描いた場合のAFは73.3%であり、両者の間には、35.2ポイントの差があり、描写の型が大きく異なると判断した。

この基準に照らしてみると、日本語母語話者による日本語での描写の割合と自らの母語での描写の割合が大きく異なる画像が、ベトナム語母語話者による描写で8枚、タイ語母語話者による描写で8枚、インドネシア語母語話者による描写で4枚、英語母語話者による描写で10枚であった。それらの中で、各言語の母語話者が、学習言語である日本語で描いた場合に、AF

が10ポイント以上減少したものを、日本語母語話者の描写の型に近づいたものとして判断した（例えば、図56に示したように、ベトナム語母語話者による描写においては、日本語母語話者のAFの割合は38.1%で、ベトナム語母語話者がベトナム語で描いた場合のAFは73.3%である。すなわち両者の間には、35.2ポイントの差が見られたのであるが、日本語での描写になるとAFの割合は、26.5ポイント分、46.9%まで減少しており、日本語母語話者の描写へと近づいていると判断した）。

このような基準で見ると、ベトナム語とタイ語を母語とする学習者では、上記の8枚のうち8枚全て、インドネシア語を母語とする学習者では4枚のうち2枚、英語を母語とする学習者では10枚のうち7枚が、それぞれ日本語母語話者の描写の型へと近づいていると判断できる結果であった（インドネシア語の残り2枚、英語母語話者の残り3枚についても、10ポイント以上の差は見られなかったが、AFの割合は減少している）。

この結果から、日本語学習者は、学習が進むにつれ日本語母語話者の「事態の描き方の型」も習得していくということが強く示唆される。このことは至極当然のことのように思われるが、日本語教育において、日本語母語話者が事態のどの参与者に焦点をあてて描く傾向があるか（という「描き方の型」）を特に教授することはほとんどないであろうことに鑑みると注目し値するものと思われる。特に、「正しい」日本語の教授に留まらず、「日本語らしい」表現、描き方の教授の必要性が指摘される現在、本調査結果は少なからぬ意味を持つものと考えられる。

もちろん、学習に伴って自然に日本語母語話者の描写の傾向に近づくということは、日本語母語話者の事態への焦点のあて方、およびそれに基づいた事態の描き方について教授の必要性を否定するものではない。多くのインプットから自然に日本語母語話者の事態の描き方の型を学んでいくとしても、意識的な教授によってより早い段階での「型」の習得に繋げられる可能性は十分にあるからである。例えば、今回の調査で用いた下記のような画像については、日本語母語話者と学習者の母語による描写に大きな違いは見られなかった。

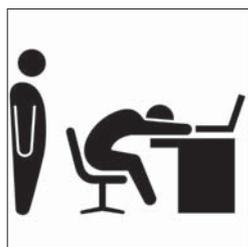


図60（再掲）

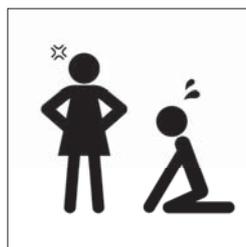


図61（再掲）



図62（再掲）

一方で下記のような画像では、日本語母語話者は、学習者の母語による描写に比べ、襲われている側の〈人〉に焦点をおいたPFの描写が多く、その差も大きい。

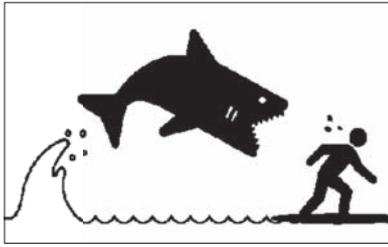


図63 (再掲)

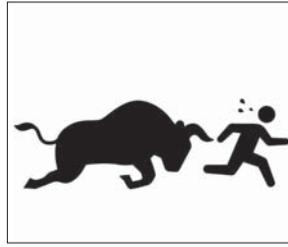


図64 (再掲)



図65 (再掲)

両者の違いは、まず前者が〈人〉から〈人〉による力や動作の働きかけがなされる事態であるのに対して、後者の画像では、〈人でない〉(すなわち共感度の低い)存在から〈人〉への働きかけであること、またその働きかけが、前者では、物理的な力の伝達というよりも〈見つめる〉や〈怒る〉、〈譲る〉といった抽象的な働きかけで、またその働きかけの結果も対象に物理的な変化を生じさせるものではないのに対して、後者は〈襲いかかる〉〈追いかける〉といった物理的な働きかけであり、その行為の結果も〈食べられる〉〈傷つく〉といった状態変化を伴うものであるという点であろう。

このような違いに鑑み、日本語学習者に日本語母語話者の事態への焦点のあて方という「描き方の型」を効率よく習得させるには、後者のようにAgentが共感度の低くなりやすい〈人以外〉の参与者であり、働きかけの内容がより物理的で他動性の高い<sup>7</sup>ような事態を数多く提示するのが効果的であろうことが予想される。本調査では、AgentとPatientという関係性以外には、参与者間に認知的な際立ちに差が出ないように、文脈から切り離し、画像はモノクロで、AgentとPatientのサイズも同じ程度に調整した。また、参与者の表情なども描かれていない状態で被験者に提示したが、それでも後者のような事態については、日本語母語話者は、英語、および東南アジアの諸言語の母語話者に比べて、Patientに焦点をあてる傾向が強いということが明らかになったのである。したがって、他動詞や、「受け身」や「使役」といった一方の参与者からもう一方の参与者への働きかけが重要になる学習項目において、学習者の言語ではPatientに焦点のあたりにくいような事態でも、あえて当該の参与者に焦点を誘導するような(例えば、Patientを少し大きく前面に描く、表情をつけて描くなどした)画像を用いて、Patientを主語にした文を何度もアウトプットさせることによって、無意識に同種の事態をPatientに焦点をあてて描写するように仕向けることも可能だと思われるのである。

## 6. 結語

以上、本研究では、〈一方の参与者から他方の参与者へと動作や働きかけがなされる事態〉について、日本語母語話者と英語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の母語話者が、それぞれどのように描く傾向があるのか、またその描き方の背後には、その描き方から推測されるような認識の違いがあるのか、などを画像に描かれた事態の描写、およびその描かれた事態の「次」の事態を想像した描写、また注意probe testなどによって明らかにしてきた。

本研究で使用了画像に示された事態を力動的な観点から見てみると、まず働きかけの内容

<sup>7</sup> 他動性のもう一つの基準であるAgentの意図性という点については、いずれも意図的な行為である。

は、鯨や牛、ゾンビなどが〈襲いかかる〉という直接的で物理的な働きかけの作用もあれば、銃を〈突きつけ〉たり、〈叱りつける〉といった銃や言葉による間接的な圧力である場合もあった。また働きかけの強度についても、上記のような強いものから、仕事中に寝ている人をただ〈見る〉という非常に弱い働きかけもあった。また働きかけの多くは攻撃的で働きかけの〈受け手〉にとってはネガティブな働きかけであったが、席を〈譲る〉、風船を〈与える〉など好意的な働きかけもあった。

また参加者に対する心理的な近さ、すなわち共感度という観点から見ても Agent は、〈人〉であったり、牛、鯨のような〈動物〉、あるいはゾンビのような〈空想上の存在〉であったりと、心理的に近いと感じやすい参加者から遠いと感じるであろうものまで、様々なものが提示された。

このように働きかけに関わる多種多様な事態の多くについて、日本語母語話者は、調査対象であった各言語母語話者よりも Patient に焦点をあてる傾向が強いことが明らかにされ、またその傾向は、東南アジアの諸言語の母語話者、英語母語話者の順で弱まっていくことも確かめられた。逆に言えば、英語母語話者が最も Agent に焦点をあてた描き方をする傾向が強く、東南アジアの諸言語の母語話者、日本語母語話者という順でその傾向が弱まる傾向があるということである。

また、これらの画像に描かれた事態の「次」の事態を想像、描写する調査によって、日英語母語話者がこれらの事態を異なった焦点のあて方で「捉えている」可能性も十分に示されたものと思われる。すなわち、英語母語話者は Agent に焦点をあてて事態を「描く」だけでなく、認識のレベルでもそのように事態を「捉える」傾向があるということであり、日本語母語話者についても、その「描き方」、「捉え方」の両方で、Patient に焦点をあてる傾向が英語母語話者より強いと考えられるのである。一方、東南アジアの諸言語の母語話者と日本語母語話者の間には統計的に有意な程の傾向の違いは見出だせなかったが、これは、次の事態についての描写がそもそも全体的に Patient に偏ったものになってしまい、描写の傾向差が日英語母語話者ほどは大きくない両者に差が現れなかったことによる。

事態の「描き方」の型だけでなく、「捉え方」の型についてもその違いが示唆された日英語母語話者については、発話を前提としない状態でも両者の「捉え方」の型に違いが見られるのか、注意 probe test も行ったが、ここには有意な違いは見られなかった。この結果から、本研究で示された日英語母語話者の事態の「捉え方」の型の違いは、あくまで発話を前提とした thinking for speaking のレベルにおけるものであることが示唆される。

最後に、本研究では、本研究の被験者となった全ての諸言語の母語話者について、1) 自らの母語での事態の描写、2) 学習言語である日本語での描写、3) 日本語母語話者による日本語での描写を比較し、1) と 3) での描き方に大きな傾向差が見られる場合に、2) が 1) に近づくのか、すなわち、日本語母語話者の事態の描き方の「型」を習得するのかを検証した。結果は、特に〈人でない〉存在から〈人〉への働きかけ、またそれが物理的な働きかけであり、結果も〈食べられる〉〈傷つく〉といった状態変化を伴う事態において、1) と 3) の描写の型が大きく異なる傾向が強く、それらの画像を学習言語で描いた 2) は日本語母語話者の描写 1) に近づいていることが明らかになった。すなわち、日本語学習者は、学習が進むにつれ、日本語母語話者の「事態の描き方の型」も習得していくということが強く示唆されたのである。

事態の描き方の「型」の研究は数多いが、本研究は特に、1) 対訳やコーパスではなく、同

じ事態についての描写の比較から、その言語の捉え方、描き方の「型」を比較した点、2) 事態の描き方（言語のレベル）だけでなく、捉え方（認識のレベル）の差異を明らかにしようとした点、3) 日本語の事態の描き方・捉え方の「習得」について明らかにしようとした点、また、4) 従来の「型」の研究では、ほとんど分析されてこなかった（しかし、日本語教育の需要は非常に高い）インドネシア語・タイ語・ベトナム語の母語話者を対象とした点において、一定の意義があるものと思われる。

一方で、本研究を進める中で、今後さらなる調査、分析が必要な課題も見出だされた。例えば、「次」の事態を描くという調査では検証できなかった東南アジアの諸言語の母語話者と日本語母語話者の「捉え方」の型の違いを明らかにすることや、注意probe testとはまた異なった形で、発話を前提としない状態での事態の「捉え方」の型の違いを検証すること、あるいは、本研究で用いた画像の中で特に日本語母語話者と日本語学習者のそれぞれの母語での描写に大きな差が見られたものを基に、日本語母語話者の焦点のあて方を習得させるような絵教材の開発などである。さらに各言語の母語話者の事態把握の「型」が言語獲得のどの段階で形成されるのかについても検証することが望まれる。また本研究では、あくまでそれぞれの言語の話者の全体的な傾向の違いを検証したが、調査で得られた描写をより詳細に見ると、同じN2あるいはN1保持者の学習者の間でも、より日本語母語話者の描写の型に近い描き方をするものと、そうでないものの差が見られる場合も少なからず存在することから、学習者ごとの特徴、あるいはその違いを生み出す要因などを明らかにする必要もある。本研究の成果を活用し、言語習得や認知科学といった分野での理論的な貢献、また日本語教育の実践の場において効果的な絵教材の開発という形で活用・応用がなされるように、今後さらに調査、分析を発展させていきたい。

## 謝辞

本研究は、「平成28年度 漢字・日本語教育研究助成制度」により多数の被験者のデータを収集・分析することができた。本研究に助成頂いた公益財団法人 日本漢字能力検定協会の関係者各位に改めて感謝を申し上げたい。また調査にあたっては、多くの日本語学習者、日本語母語話者の方々にご協力頂き、また調査データの収集・分析にあたっては多くの研究協力者にご助力頂いた。本研究に携わってくださった全ての協力者の方にここで改めて御礼申し上げる。

## 参考文献

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- 池上嘉彦・守屋三千代（2009）『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』ひつじ書房。
- 伊藤創・王蓓淳（2016）「日本語・中国語・英語における事態把握の『型』と事態描写の『型』の関連性」『政大日本研究』13：21-47。
- 尾谷昌則（2001）「いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて—認知文法の観点から—」『白馬夏期言語学会論集』12：45-60。
- 小野寺美智子（2008）「日英語の受動構文の認知的基盤『事態把握』の観点から」『拓殖大学

- 語学研究』119：11-32.
- 金谷武洋（2004）『日本語にも主語はなかった』講談社選書メチエ.
- 国広哲弥（1974）「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較」『英語青年』119（11）：48-50.
- Slobin, Dan I. (1987) Thinking for Speaking. *Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 435-445.
- Talmy, Leonard (2000) Typology and Process in Concept Structuring, *Toward a cognitive semantics II*. (訳：坂原茂 (2000) 『認知言語学の発展』ひつじ書房).
- 高橋清子（2006）「日本語から見たタイ語—タイ語・中国語・日本語三つ巴の楽しさ—」『日本語学』第25巻第3号：34-44.
- 谷口一美（2005）『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房.
- Tomline, Russell S. (1997) Mapping Conceptual Representations into Linguistic Representations: The Role of Attention in Grammar in Jan Nuyts and Eric Pederson (eds.) *Language and Conceptualization*. Cambridge University Press: 162-189.
- 外山滋比古（1973）『日本語の論理』中央公論社.
- Hinds, John・西光義弘（1986）『Situation and Person Focus—日本語らしさと英語らしさ—』くろしお出版.
- 峰岸真琴（2012）「アジアの視座からの言語学を目指して：タイ語研究を例に」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』9：203-214.
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房.
- 守屋三千代（2010）「広告における受益可能表現—〈事態把握〉の観点より—」『創価大学日本語日本文学』21：19-32.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.